

判断基準の可視化によって思考を深める 社会科公民的分野の授業開発

ー ツールミン図とICTを利用した生徒間交流を重視した学習のイノベーションー

迫 眞也 ・ 小原友行* ・ 草原和博*

要約：知識偏重がいわゆる今日の社会科教育において、社会の見方・考え方を深めていくこと、すなわち、社会科における思考の深まりは重要である。本研究においては、生徒がツールミン図を作成し、ICTを用いて課題に対する意見を説明をする授業を実施し、生徒の思考の深まりを見取ることができるかどうかを明らかにすることを目的とした。その結果、検証授業の成果物からは、取り扱う授業内容によって大きなちがいがあったものの、単純な事実を基準に結びつけるだけでなく、複数の事実を総合的に考察した基準が見られた。これらのことから、ツールミン図を利用した授業が、特に身近で考えやすい資料をもとに意思決定を求める授業や、そうでない場合でも継続して利用することで、より思考を深めることができることを明らかにした。

キーワード：ツールミン図、ICT、判断基準

I. はじめに

本校では、2011年度より「小学校・中学校9年間の学びがつながる授業づくりのあり方」をテーマに研究を進めている。巷間、社会科の小中接続でいわれる課題のひとつとして、澤井陽介（文部科学省教科調査官）は、平成24年度岡山市教育研究研修センター小学校・中学校社会科研修講座にて「社会科は、問題解決という生きて働く力を育てようとしているのに、学校種が上れば上がるほど覚える社会科になり、知識が重くのしかかってくる現状」を指摘している。本校の小・中学校各学年において行われた実態調査においても、学年が上がる毎に「おぼえること」が「やや不得意・不得意」と回答する割合が増加している。

確かに、社会科の学習において、おぼえるということは大切である。しかし、それ自体が本来の目的というわけではない。最終的に生徒には、社会を知り、わかり、新たな社会を形づくっていくための公民的資質の向上をはかることこそが求められている。そのために何をなすべきかが、社会科教育の課題ではないだろうか。

II. 研究の経緯

本校社会科では、昨年度まで「社会的な見方・考え方の深化をはかる宗教的教育内容の授業開発」に地理的分野・歴史的分野・公民的分野でそれぞれ取り組ん

だ。こうした取り組みの中で、宗教的教育内容の授業開発を通じて、宗教の影響力や社会の中における価値などの視点を獲得、といった社会の見方を広げることには一定の成果を得た。しかしながら、成果として確認できたものは視野の広がりにとどまり、社会的な見方・考え方の深まりについては、なお課題が残されていた。そこで、今年度は社会的な見方・考え方の深化、すなわち思考の深まりに着目して研究を行うこととした。

昨年度までの研究において、社会科における思考の深まりとは、自己否定的な成長を遂げることとした（迫ら、2013）。生徒は授業を通じて、既存の知識では説明がつかない事象に遭遇した際に、科学的探究を通じて、より説明力の大きな科学的知識を得る。すなわち、生徒が授業の中で直面した課題について、説明できるようになることが、思考の深まりであると言える。しかし、生徒にとって、説明するということのハードルは高い。生徒たちは授業で示された課題に対して、自分なりに考え、意思決定している。しかし、自分がどのように考えて結論を出したのかという思考の筋道をふり返らせると、必ずしも明確な答えの返ってこないことが多い。

そこで、本校社会科では、生徒に意思決定させる際のツールとして、ツールミン図の活用を進めている。

* 広島大学大学院教育学研究科

トゥールミン図とは、スティーブン・トゥールミン (2011) で提示された議論の形式構造である (図 1)。

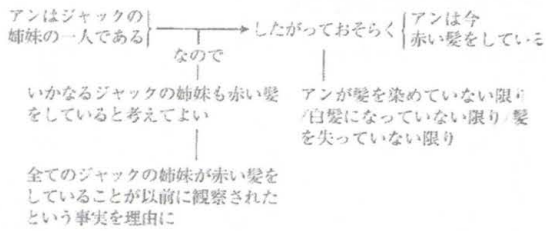


図 1 トゥールミン図の一例

この図式によって、個人の言語行為は“見える化”され、どのような事実をもとに、どのような論拠から結論 (意見) が導き出されたのかを明らかにすることができる。池野 (2014) は、トゥールミン図が社会科学研究に用いられる理由のひとつとして、学習という現代教育の要請にもとづく、一人ひとりの子どもが何を学び、どのように発展させているのかを見て取るために、議論の発展向上は有効であることを挙げている。トゥールミン図によって自らの思考過程を可視化することで、どのように結論を導き出したかが、はっきりとわかるようになることを期待されている。

しかしながら、従来のトゥールミン図を用いた授業は、価値判断を指導することに重点を置いたものが多く見られる。児玉 (2014) は、このことを指摘し、事実認識や判断にも目を向けた利用方法の拡大を図ることの必要性を説いた。こうした考えに基づき、本稿では、トゥールミン図を生徒の考えをまとめさせる意思決定のツールとしての利用よりも、その思考過程をふり返るツールとしての側面を重視している。

III. 研究の目的

本研究では、生徒に自らの主張の判断基準を明らかにさせるプロセスをもつ授業を行う。授業においては、生徒は自らの思考過程をふり返り、課題に対する判断基準を明らかにし、その上で、それぞれの思考過程を交流することが期待される。本研究は、そのプロセスを通じて、生徒たちはより多面的・多角的な見方ができるようになることで、より深く思考することができるようになるかどうかを明らかにすることを目的とする。

IV. 研究の方法

1 研究対象者

広島大学附属東雲中学校第 3 学年 79 名

(男子 36 名, 女子 43 名)

2 方法

検証のための授業では、トゥールミン図を用いて、自らの思考過程から判断基準を明らかにさせる授業を実施する。その際、授業で取り組んだワークシートに記述された判断基準を、以下の表 1 のルーブリックで評価する。

表 1 判断基準を評価するルーブリック

A	判断基準を事実をもとに導き出して明らかにしている。
B	判断基準を単純な事実の有無から明らかにしている。
C	判断基準が具体的な事実をもとに明らかにしているか不明、もしくは、誤った事実にもとにしている。

授業は 3 回に分けて行い、それぞれの授業での A～C 評価の割合を比較する。また、簡易トゥールミン図の各項目の記入から、未記入のもの割合についても比較する。

V. 実践の概略 (計画)

1 授業の構成

検証授業では原則二者択一となるような課題を示し、これに対する意見を、トゥールミン図を利用して構築させる。これは、検証授業において「本来は日常的な議論を分析、評価する図式モデルであるトゥールミン図 (佐長, 2013)」を、議論をすることを目的とするのではなく、分析的モデルとして活用するという意図からである。さらに、一時間単位の授業に活用するために、そのエッセンスとなる C<主張>・D<事実>・W<理由>・B<裏づけ>の 4 つのポイントのみで構成した簡易トゥールミン図 (以下、図と呼ぶ) を用いる (図 2)。これを用いて、授業の冒頭に示した課題に対する意見を構築させ、個人思考の場面を設定

する。

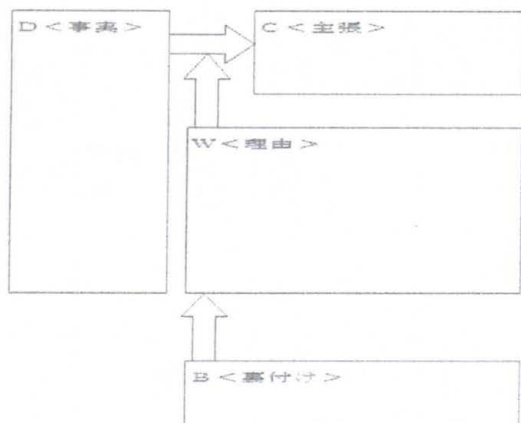


図2 簡易ツールミン図

次に、作成した図を用いて、なぜそのような結論になったかを4人班で交流し、その後、全体発表を行う。本校の各教室には ActiveBoard といわれる投影式の電子黒板が整備されており、これと実物投影機を組み合わせ、黒板の半面ほどの大きさに図を拡大する。交流の際、生徒は図式化された自らの思考過程を背景に映しながら、自らの意見を発表する。

その後、他の生徒の発表をふまえて、自らの意見を修正・補強し、図を完成させる。完成した図をふり返り、最終的に結論を導いた基準はどのようなものであったかを、図を参考に、ワークシートに記述させる。つまり、自らが主張を構成する際に、ポイントとなっ

た点についての説明を求める形である。

2 実際の授業

(1) グローバル社会と人権 (以下、人権授業と呼ぶ)

ライシテ (laïcité) といわれる独特な政教分離原則をもつフランスにおいて、学校にヒジャブ (ムスリムの女性が着用するスカーフ) をつけて登校した生徒が、教室内でこれを外すことを拒否したことを理由に退学処分となった事件を扱った。生徒は、この事件の顛末とフランスにおける宗教事情などをもとに、フランスでは信教の自由が本当に認められているといえるかどうかについて、その是非を問うた。

(2) 裁判員裁判 (以下、裁判授業と呼ぶ)

コンビニエンスストアで起きた万引きについて、弁護側は窃盗罪の適用を求めたのに対して、検察側は店主がけがを負ったことなどから、強盗殺人未遂での立件を目指した仮定の裁判を設定した。生徒には、裁判員として、証拠をもとに、被告に窃盗罪もしくは強盗殺人未遂罪のいずれを適用するかを判断させた。

(3) 政府の経済活動と租税 (以下、租税授業と呼ぶ)

日本において、現在非課税の宗教法人について、課税することの妥当性の有無を考えさせた。(詳細は以下の表2を参照)

表2 実践授業「政府の経済活動と租税」

学習活動と内容	指導上の留意点 (◆評価)
1. 導入 (10分) <input type="checkbox"/> 前時の授業を復習する。 ・これから支出が増えるのは、どのようなお金? → 社会保障関係費, 国債費 ・この状態が続くと、どうなるか → 借金が増えすぎる, 返せなくなる ・諸外国に比べて、どうだったか → 極端に借金額が多く, 対GDP比200%以上 ・どうする必要があるのか → 歳出を減らす, 増税する <input type="checkbox"/> 法人とは何か, 考える。 ・以下の団体の共通点は何だろう → すべて何らかの法人	<input type="checkbox"/> 前時のポイントを簡単に確認する。 <input type="checkbox"/> 諸外国に比べて深刻であることを印象づける。 <input type="checkbox"/> 日本の財政赤字が巨額であることをおさえる。 <input type="checkbox"/> 財政赤字を解消する方法は増税が有力と考えられていることをおさえる

広島大学 JA広島 マツダ 厳島神社
JF広島県漁連 サコ・エンタープライズ

- ・法人にかかる税金は何だった？→法人税
- ・実は、この中に税金を払っていない法人と、ほとんど払っていない法人がある
→国立大学法人（国費で運営）
→厳島神社（宗教活動については無税）
- ・大学はともかく、宗教法人って、他の法人と何が違うんだろう？日本が大変なときに、税金払わなくていいの？そもそも、国はなにを基準に税金をかけているの？

○わかりにくいようであれば、(株)や(財)などの記号をつけて気づかせる。

○法人の説明は、前時の復習にとどめる。

○宗教法人についてはあまり細かく説明することは避け、なぜ払っていないかについて興味を持たせる。

宗教法人に税金をかけるべきだろうか

2. 展開 (35分)

□伊勢神宮を例に、宗教法人の収入源を考える

- ・お賽銭 ・お守り ・初穂料 ・寄附

□宗教法人が課税されない理由とその反論を読み取る。

- ・なぜ宗教法人には、税金がかからないのか、さらにそれに対する反論を、資料から読み取ろう
公益性がある 浄財である 文化財を管理...
サービス業だ 財政が厳しいのにひいきだ...

□外国の課税についての資料を読み取り、交流する。

- ・外国の制度と日本の制度を比較して、どんなところに共通点と相違点があるだろう

(共通点)

(相違点)

宗教活動は非課税

国教を定める国がある

営利活動は課税

税がある国とない国がある

□自分の意見をまとめる。

□意見を交流する。

3. まとめ (5分)

□最終的な自分の判断基準をふり返る。

○実際に自分たちがどんなところでお金を使ったかを中心に考えさせる。

○収益事業には軽減されるが税金はかかる。

○新聞記事から、読み取らせる。

○公益性を含め、さまざまな価値観について賛否あることをおさえる。

○資料を示し、諸外国の状況を確認させる。

○最初に、各国の宗教人口比率についての違いを確認してから、読み取らせる

○キリスト教圏、イスラム教圏、仏教圏など、さまざまな国の制度と比較させる。

○先に示した資料をもとに、トゥールミン図を使って考えさせる。

◆自分の意見を構築するための情報を、複数の資料から読み取ることができる。【技能】

○書画カメラを利用して、発表させる。

◆自らの判断基準を明らかにすることができる。

【思考・判断・表現】

VI. 結果

(1)～(3)の各授業で、「表1 判断基準を評価するルーブリック」に基づいたA～C評価の割合は、以下の

ようになった(いずれもN=79)。作成されたトゥールミン図については、いずれの授業についても、B<裏付け>意外については全て記入されていた。

(1) グローバル社会と人権

表3 人権授業の評価結果

n = 75 (94.9%)

A	B	C
9 (12.0%)	42 (56.0%)	24 (32.0%)

B評価のものが半数以上見られた。「個人レベルでの信教の自由が認められている (かどうか)」「十字架・スカーフが禁止されている (かどうか)」など、資料にある文言をそのまま引き、判断基準としているものが多い。

A評価については、あまり見られなかった。「(退学処分にすることで) 宗教自体を私生活でダメ!と言っていることになるから」「(スカーフ着用などが) 少しでも認められていなかったら (信教の自由は) 認められていない」のように、ひとつの事実から自分なりの基準を見出しているものがほとんどであった。

C評価では「一番やりたいようにできるかどうか」「公共の福祉に反しているか、いないか」などのように、どのような事実から基準を導き出したのかが判然としないものが多く見られた。

また、B<裏付け>に関しては全体の45.3%が未記入であり、W<理由>の論拠を示すことができていなかった。

B<裏付け>に関しては全体の29.3%が未記入であり、(1)人権授業に比べて大きく減少している。

(3) 政府の経済活動と租税

表5 租税授業の評価結果

n = 77 (97.4%)

A	B	C
28 (36.3%)	24 (31.1%)	25 (32.4%)

A・B・C評価とも、ほぼ同じぐらいの割合で分布している。

特にB評価のものについては、C<主張>にあわせてD<事実>を選び取ったものも見られた。これは、提示した資料が課税容認、あるいは反対の立場を明確にした意見であったことから、「課税すべき」の基準として「国の財政状況や国民の負担」、「課税すべきでない」の基準として「他の国が課税しているかどうか」など、主張によって選ばれる事実がはっきり分かれていたことによるものであると推測される。事実の有無と基準を直接結びつけたB評価の基準については、同じ事実から別の主張が見られることはほとんどなかった。

また、B<裏付け>の未記入率は35.0%であり、(2)裁判授業に比べて増加したが、(1)人権授業に比べては減少している。

(2) 裁判員裁判

表4 裁判授業の評価結果

n = 75 (94.9%)

A	B	C
43 (57.3%)	30 (40.0%)	2 (2.6%)

A評価の割合が、(1)人権授業・(3)租税授業に比べて非常に高い。基準の構成も「被害がどうより、被告人が故意に“引きずって”(中略)、自分はそれを故意だったと考えたから」「犯行に至る経緯や、母親の証言などから殺意があったと思えない」など、具体的な複数の事実を組み合わせ導き出された基準が数多く見られた。

B評価についても、単独の事実のみを取り上げたものはほぼなく、「初犯で、被害は少なく、示談が成立している」などのように、判断に要した複数の事実を基準としてあげている。

VII. 考察

これらの検証授業の成果物の比較より、宗教的教育内容を取り扱った(1)人権授業・(3)租税授業と、(2)裁判授業では、評価の分布に大きな差が生まれた。これは、生徒の生活体験から、比較的距離感のあるものを扱う授業に比べ、こうした距離感の近いものを取り扱った授業のほうが、より考えやすかったということが推測される。また、意思決定の過程で、自らの主張を正当化するために、より多くのエビデンスを挙げようとしているとも考えられる。したがって、図の利用は、こうした生徒に身近に感じられる題材を用いて意思決定させる際に、より多くの事実を結びつけて判断基準を明らかにすることができ、思考を深めることに効果があると考えられる。

また、(2)裁判授業以外の、同じく宗教的内容を取り扱った(1)人権授業と(3)租税授業の評価についても

差異が見られる。両者ともC評価についてはほぼ変化が見られなかったものの、先行して行った(1)人権授業に比べて、後から行った(3)租税授業については、B<裏付け>の未記入率は低下し、A評価の割合が高まっている。個々の内容についても、(1)人権授業では「宗教を表に出す(スカーフをつける)だけでは、他の宗教は侵害されない」のように、ひとつの事実から基準を導き出しているものが目立った。しかし、(3)租税授業では「所得税を払ってしようと“いろんな宗教に属する人が多い”日本では、各宗教の利益は大きいから」のように、「宗教者が所得税を納めている」「日本では信教がはっきりしていない」「宗教法人には大きな収入がある」といった複数の事実を勘案して基準を定めているものが増えている。つまり、図を継続的に利用することによって、生徒はより多くの事実から判断基準を導き出しており、宗教的教育内容のような、生徒の生活体験から比較的距離のある題材についても、思考を深めるために有効なツールになっているといえる。

VIII おわりに

今回の研究を終えて、生徒はトゥールミン図を用いて基準づくりをすることで、より多くの事実を総合的に考察して説明することができるようになり、思考が深まっていることがわかった。

しかしながら、課題も残った。生徒間交流がそれぞ

れの生徒の思考にどのように影響したかについては、十分な検証とはならなかった。ICTの活用成果についても同様のことがいえ、授業展開にあわせて、生徒がどのように思考を変遷させているかを、今後検証していきたい。

引用・参考文献

- 池野範男：「トゥールミン・モデルー思考指導の見直しヒント なぜ社会科研究で利用されるのか」, 社会科教育10月号, 98-99, 2014.
- 児玉康弘：「社会科におけるトゥールミン図式の利用に関する再考察」, 兵庫教育大学研究紀要 第45巻, 77-87, 2014.
- 迫眞也ほか：社会的な見方・考え方の深化をはかる宗教的教育内容の授業開発Ⅲー宗教的視点と題材を用いた公民的分野の学習を通じてー, 広島大学附属東雲中学校研究紀要『中学教育』第45集, 25-31, 2013.
- スティーブン・トゥールミン (訳) 戸田山和久, 福澤一吉：議論の技法, 東京図書, 2011.
- 佐長健司：「トゥールミン・モデル」の再解釈による社会科授業構成の状況論的転回, 『佐賀大学文化教育学部研究論文集』17(2), 1-16, 2013.
- 全国社会科教育学会：『社会科教育実践ハンドブック』, 明治図書, 2011.

The development of lessons for civics to make students' thought deepen through the visualization of the criteria
-The lesson innovation to focus on the exchanging between students making use of Toulmin charts and ICT-

In the pedagogy of social studies focused much on knowledge nowadays, it is important to deepen students' thought about their ways of social thinking. This research aimed to reveal if we could grasp how much students deepen their thoughts through the lessons that students make Toulmin charts and express their opinions about a topic of the lesson using ICT. As a result, students' thoughts based on some facts as well as a single fact were shown from their answers on the handout used in the research lesson, although the differences were found out because of the contents of the lessons. From this consequence, Toulmin charts offered to make students' thought deepen, especially in the lesson of determination of students' intents with some data easy to use and if not, by keeping using the Toulmin charts.

Key words : Toulmin charts, ICT, criteria